

令和6年白老町議会総務文教常任委員会会議録

令和6年10月 1日（火曜日）

開 会 午前10時00分

閉 会 午前11時52分

○会議に付した事件

所管事務調査

1. アイヌ文化の継承と担い手対策について
 2. 視察の日程について
 3. その他
-

○出席委員（6名）

委員長	貳又聖規君	副委員長	森山秀晃君
委員	長谷川かおり君	委員	佐藤雄大君
委員	前田博之君	委員	広地紀彰君

○欠席委員（なし）

○説明のため出席した者の職氏名

政策推進課長	太田誠君
アイヌ政策推進室長	鵜澤友寿君
アイヌ政策推進室主任	大西健太君

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	本間弘樹君
主 幹	小山内恵君

◎開会の宣告

○委員長（貳又聖規君） ただいまより、総務文教常任委員会を開会いたします。

（午前10時00分）

○委員長（貳又聖規君） 本日の所管事務調査はアイヌ文化の継承と担い手対策についてであります。

まず、町側の担当者におかれましては、短期間での資料、とても内容の濃いものを感謝申し上げます。本当にありがとうございます。早速ではありますが、説明をお願いします。

太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 本日はアイヌ文化の継承と担い手対策について説明をいたします。これより先は担当の者から資料に沿って説明させていただきます。

今アイヌ文化ということで、やはり喫緊の課題としては、本当にこのアイヌ文化の継承と担い手対策だということで、アイヌ協会、また関係団体もそのような形で役場に相談などが多く入っていて、今後本当に白老のアイヌ文化をどう伝えていくかというのは、町とアイヌ協会、また議会と一緒に進めていかなければならないのだなと考えておりますので、今後ともお力添えをよろしくお願いいたします。

では、担当から説明させていただきます。

○委員長（貳又聖規君） 大西アイヌ政策推進室主任。

○アイヌ政策推進室主任（大西健太君） 本日の説明をさせていただきます政策推進課の大西と申します。本日はよろしくお願いいたします。

資料につきまして、本日は7ページものの説明資料とA3の横長の表と、急遽ですけれどもこちらのA4の横の数字を書いたもので説明をさせていただきます。

まず、1、白老町アイヌ施策基本方針についてでございます。町では、今後の白老町における中長期的な展望に立ったアイヌ施策の総合的方針として、平成19年9月に白老町アイヌ施策基本方針を策定いたしまして、そのあと、令和4年3月に改定を行っております。町では基本方針に則ったアイヌ政策を進めております。

2、基本方針における現状についてでございます。（1）平成18年から他地域より先行したアイヌの伝統的生活空間イオル再生事業に着手しておりまして、一般社団法人白老モシリが活動の中心となって、町内の各地区において粟、ヒエなどの自然素材の育成を実施しております。そのほか町内の小中学生や地域住民を対象とした海・山・川の幅広い自然環境を活用した体験交流事業を実施しております。（2）アイヌ民族の変革の歴史を正しく認識できる社会の創造に努め、アイヌ民族の尊厳と自立を回復することにより、アイヌ民族の歴史と文化を次の世代、未来の子供たちに引き継ぐために中長期的な展望に立ったアイヌ施策の総合的指針の白老町アイヌ施策基本方針を、全国の自治体に先駆けて平成19年策定いたしました。

（3）白老町アイヌ施策基本方針に掲げている目的でございます。①先人の尊厳と労苦の歴史を振り返り、未来を見据え、アイヌ民族としての誇りを高める。②全町民がアイヌ民族へ

の正しい認識と理解を深める。③互いの文化や人格・個性を尊重し合える、多文化共生社会の実現に努める。④白老における伝統的な文化の保存・伝承・発展を通して、地域の繁栄を推進する。以上の目的を達成しまして、多文化共生のまちづくりを実現するため、様々な施策に取り組んでいるところでございます。

3、アイヌ関係団体についてでございます。町内には主にこの表に掲げております11団体が活動をされておりまして、公益財団法人アイヌ民族財団ほか、5つの刺しゅうサークルも活動しておりまして、非常に幅広い団体が日々活動されているところでございます。

4、アイヌ政策推進交付金についてでございます。町では、令和元年度より国の内閣府が所管しておりますアイヌ政策推進交付金を受けております。町では交付金を活用し、アイヌ文化保存・伝承・発展活動等に資する取組を行っております。今年度、令和6年度の交付金事業については、A3横のこちらの表を御覧いただければと思います。

5、基本方針における課題についてでございます。課題1番としまして、白老地域のアイヌ民族の歴史や文化の研究・保存・伝承の在り方についてでございます。課題2、伝統的工芸品の作成や、伝統的有用植物や林産物等を用いた商品開発に持続的・安定的に取り組むための素材（原材料）確保の在り方についてでございます。課題3、アイヌ関係団体や町内関係機関・団体との有機的連携による、それぞれの強みを生かした施策展開の在り方についてでございます。課題4、伝承人材の高齢化に対応し、将来にわたりアイヌ文化を継承するための次世代の担い手確保の在り方についてでございます。

課題5、これらの課題を着実に解決するための町内アイヌ関係団体のさらなる連携強化の在り方についてでございます。

3ページの、6、課題の対策についてでございます。課題1の対策について、町では一般社団法人白老アイヌ協会をはじめとするアイヌ関係団体とともに、国のアイヌ政策推進交付金を活用した委託事業を展開しております。町から各アイヌ関係団体に事業委託をいたしまして、アイヌ文化等の研究保存伝承等を推進しているところでございます。課題2に対する対策について、一般社団法人白老アイヌ協会の委託事業の中に、刺しゅう講座、木彫講座を開講しております。その中で、伝統工芸品の技術習得や担い手育成など魅力を感じていただく講座を開講しているところでございます。また、持続的・安定的に素材の確保については、一般社団法人白老モシリに委託しておりますイオル再生事業について、持続的及び安定的に素材が確保できるように取り組んでいるところでございます。課題3について、町では、ウポポイでは道内外でのPR活動や、来場者増加のための協議や取組を一体となっているところでございまして、そのほか、白老アイヌ協会については、人材育成と商品開発など、白老のアイヌ文化の発展に寄与している事業を展開しているところでございます。以下の団体についてはこちらの記載のとおりとさせていただいております。4ページにつきまして、課題4の対策について、人材育成事業につきまして、幅広い世代をターゲットにして情報発信を行うほか、町民以外の方々への周知活動も必要と捉えているところでございます。白老のアイヌ文化に興味を持つ層を増やす取組から始めることが非常に大切であると考えております。課題5の対策について、町ではアイヌ関係団体と逐次ヒアリングなどを通して、白老の

アイヌ文化に何が必要であるかを主体的に把握し、町とアイヌ関係団体が白老のアイヌ文化の振興に密接に関わってまいりたいと思っております。

7、白老町のアイヌ文化人材育成事業についてでございます。町では、国のアイヌ政策推進交付金を活用しましてアイヌ文化保存・伝承・発展活動に資する取組の一環として、アイヌ文化工芸品等に携わる方々を育成するために、以下の団体・個人に事業を委託しているところでございます。また、交付金委託事業以外に、町内ではアイヌ文様刺しゅうサークル等が5団体活動されておまして、主に週1回程度、町内の生活館、主に白老生活館、川沿生活館を会場として、日々技術の向上をはじめとして初学者への指導や次世代の担い手育成を行っております。制作した作品について、インターネット販売のほか、町内の観光施設や町外のお土産品店等での販売や町外企業に直接販売している実績もでございます。(1)一般社団法人白老アイヌ協会をご説明させていただきます。昨年度の令和5年度につきましては、4つの講座を主に開講しております。講座としては、文化講座、歴史講座、アイヌ文様刺しゅう講座、木彫講座の4つの講座で、開講回数は4講座とも10回程度を開講しております。(2)白老楽しく・やさしいアイヌ語教室についてでございます。アイヌ語研究者の大須賀るえ子氏が講師となっておりまして、北海道立図書館にマイクロフィルム形式で所蔵されておりますウエペケルの原文コピーを取り寄せて、分析して行ごとにナンバリングを施しまして、ローマ字筆記体から活字への変換作業を行うことから作業を行いまして、編集の作業を行った原稿につきましては、冊子を製本化しております。その冊子を製本化して北海道博物館やアイヌ語研究を行う機関等に配布して研究成果の共有を図るとともに、物語を多くの人々に伝えてアイヌ文化の保存と伝承活動の推進につなげた受講者のアイヌ語学の向上ですとか、次世代のアイヌ語話者の育成に寄与しているものと捉えております。(3)白老民俗芸能保存会についてでございます。こちらの事業につきましては、令和6年度から実施しておまして、今後の地域のアイヌ文化の伝承・発展に向けたアイヌ古式舞踊の伝承や衣装に関わる活動推進や、次世代の担う伝承者育成を主にターゲットとして行っております。(4)一般社団法人白老モシリでございます。アイヌ文化に必要な樹木や草木の自然素材を植生して、アイヌ文化の伝承活動等に使用することを目的とするイオル再生事業を行っているところでございます。(5)アイヌ文様刺しゅうサークルについてでございます。アイヌ文様刺しゅうサークルについては、5団体活動しておまして、サークルがテケカラペ、フッチコラチ、チシポの会、エミナの会、のんのクラブの5団体が活動しておまして、主に週1回程度、各生活館で活動をしているところでございます。

8、人材育成に関わる課題についてでございます。(1)担い手が高齢化しておまして、身体的な影響等により講師を引き受けることができない方が増えていると捉えているところでございます。(2)町内の若年者が減っており、後継者となる層がそれに伴って減っていることから、担い手不足は生じているものと捉えているところでございます。(3)国内の少子高齢化によりまして、本町の人材育成を請負っている白老アイヌ協会の会員数も平成23年度284人と比較すると68名減少しているほか、北海道アイヌ協会でも、ピーク時の平成11年の4,749人と比較すると2,760名減少しておまして、半分以下となっていることから、今後も

高齢化の影響によります傳承人材が減少をたどることが想定されます。 ですので、アイヌ文化の次世代の減少について非常に危惧しているところでございます。また、将来のアイヌ文化傳承の中核的役割を担う人材確保や、アイヌ文化の価値をさらに高めるための取組を推進する必要があると捉えているところでございます。(4) 人材育成の情報発信について、主催者側のチラシ・ポスターなどのアナログ的な手法による情報発信が主なのですが、後継者となる層が20代から40代がメインと捉えているところでございます。ですので、情報の取得については、その方々たちはインターネットやSNS媒体が主であると考えておりまして、情報発信者と受け手側で乖離が生じていると思っております。

9、人材育成に係る今後の対策等についてでございます。アイヌ文化での人材育成については、一朝一夕で講師の領域に達することは非常に困難であると捉えておりまして、長い年月をかけて少しずつ技術を磨く必要があると考えております。ですので、熟練度に応じた講座を細かく設定する方法や受講者を増やすため、他市町村に居住している方々もターゲットにして情報発信を行って、アイヌ文化の担い手を将来的に白老に移住したいという方々の機運を醸成する取組を必要と考えております。そのために移住定住対策と連携した取組が必要であると捉えているところでございまして、町の既存事業である家賃サポート事業や将来店舗を持つことを考える際には、空き店舗活用等創業支援事業などがありまして、白老に居住しやすい、受け入れ体制を整備することも重要であると捉えているところでございます。また、次世代の担い手育成の入口といたしまして、道内外での移住プロモーションと連携した白老のアイヌ文化をPRする場を創出するなど、白老のアイヌ文化に興味を持つきっかけをつくり出し、興味を持つ層の裾野を広げる取組も非常に重要であると捉えているところでございます。また、白老に居住している子供たちに、ふるさと給食で提供されるオハウなどのアイヌ伝統料理や、アイヌ文化に関する食材や食文化の説明用チラシの配布や、イオル再生事業のふるさと学習で触れるアイヌ文化について興味を持ってもらう取組を行って、担い手不足の解消に取り組んでまいりたいと考えているところでございます。

○委員長（貳又聖規君） 鵜澤アイヌ政策推進室室長。

○アイヌ政策推進室長（鵜澤友寿君） 次に令和6年度のアイヌ政策推進交付金の活用事業について、ご説明させていただきたいと思っております。もうすでに予算ご審議いただいて議決いただいております、令和6年度の当初予算を出しております、詳細は記載のとおりなのですが、事業名が水色のところが予算上の事業名になっております。黄色い欄が事業費の総額となっております。ピンクのところはアイヌ交付金の額となっておりますので、詳細は記載事項を御覧いただければ幸いです。

補足資料についてですが、こちらは各3か年、令和3年度から5年度の年度ごとの受講実績を掲載しております。これ実際の受講人数と延べ人数を記載しております。

あとアイヌ協会について、一番最大のアイヌ関係団体なので、年齢構成というものも記載しております、若年層が圧倒的に少ないです。例えば20代、30代で9.8%というような、そのように浮き彫りになってしまっているのですが、今日はこのような資料を出した中で議論いただければと思います。

○委員長（貳又聖規君） まず、説明一通りありがとうございます。

今、各委員から質問を受ける前に、私から冒頭でちょっと分かればというところで確認がありますが、アイヌ人口を2017年度調査で1万3,000人ということで、これその前の調査では確か私の記憶だったら2万4,000人ぐらいあったのかなと思います。かなり人数が減っていて、その辺りの入口として、町でその辺の数値、実態を押さえているところがありますか。もしなければそれはまた後ほど資料としていただきたいと思います。

私としてはいろいろと事前に調査をしていると、やはり登録人口がかなり落ちたなというところを感じ取り、これがどのようなことなのかなと思いましたので、これはまた追って資料をいただければと思います。

それでは、各委員からご質問がある方どうぞ。

長谷川かおり委員。

○委員（長谷川かおり君） 今日のご説明ありがとうございます。

まちで取り組んでいること、そして町でもしっかりと課題は捉えているのですが、アイヌ文化というのはやはり白老は観光を取り込んでいて、そしてそこから繁栄して、木彫であったり、刺しゅうとかいろいろなところで利益を生んで、当事者の方たちも生活、生業をされている方がたくさんいると思うのですが、その中で今、なかなか人材、後継者、いろいろ傳承する方々も高齢になっていて伝える方も大変になってきているのは、それは私もいろいろな方のお話を聞いて理解しているところです。それで、まちとして課題をしっかりと捉えているのですが、今後いろいろな方たちの個別に何か相談できる窓口など、この7ページの人材育成の情報発信のところ、後継者となる層はこれから20から40代がメインと考えられると、そこで発信の仕方です。そのところは何か町で、今後、この方たちに対しての手助けというか、なかなかインターネット発信できない方々に対して手助けする窓口というか、総合的な、相談する窓口というのを設けることはないのか。その方向性について伺います。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 後継者ということで窓口の部分でございますけれども、基本的にアイヌ交付金を使ってアイヌ協会であったり、白老モシリ、アイヌ語教室やそのような方のご協力をいただいただきながら文化の傳承であったり発信の取組もしているところでございます。

やはり、役場として考えることは、例えば事務局体制の強化ということで観光協会や商工会みたいになような事務局のような、それなりに金額は別としてもお支払いしてということで、今どうしても役場OBですとか、そのような方々にやっていただいていることで事務局のほうも高齢化しているところなので、まずはその事務局体制の強化は、今後取り組んでいかなければだめなのかなとまちとしては考えています。

個別に相談できる体制というところでいけば、アイヌ協会なり、白老モシリなり。先週の土曜日にイオル体験事業で、海のイオルで地引き網体験に、私たちも役場とも協力しながら情報発信であったり、お手伝いであったりさせていただいていますので、そのような相談体制というのは構築されているのかなあというところでございます。ただ、やはりその傳承者

たちに 寄り添ってやっているかという、なかなかできていない部分もありますので、その部分は個別に相談する体制の強化をしていかなければだめなのかなあと思っております。

S N Sというのは、役場のD Xの推進の中に町民のためのD Xの推進というのもありますのでその中で、あとは企業に対してのD Xの推進というのもD Xの基本方針の中に示されていますので、そのようなD Xの推進の部分と連携しながら情報発信に努めていければいいかなとは考えております。

○委員長（貳又聖規君） ほか、質疑ある方はどうぞ。

前田博之委員。

○委員（前田博之君） 確認だけしたいのですが、まず資料の2ページ、アイヌ関係の団体があるのですがアイヌ協会は会員数、これは分かります。

白老モシリが139名、これみんなアイヌ協会と同じで、会員の人数はそういう人方に限定されるのですか。それともこれは、一般の方々も会員になっているということになるのでしょうか。

もし、アイヌ協会と同じような状況の中に入っていれば、350名ぐらいになるのか。会員数をオーバーするけれども、ダブって活動したのか。

もう一つ、今日配布された事業表があるでしょう。これで僕もいろいろ聞くのですが、この刺しゅうや木彫、アイヌ語講座など、一生懸命やってくれているのはいいのだけれど、この受講者数が新規ではなくて同じ人がかなり、技術を継承するのに同じよう人がやっていて、新しい人がなかなか入ってきて秘術が身につくということと、この言葉がいいのかどうかかわからないけれど、アイヌ会員の年齢構成の中で、アイヌの人数の若い人が、本来引き継ぐ人数がほとんどいないという実態があると、僕は聞いているのだけれど、実際どうなのか。

その辺2点が、今後大変なことだと思うのです。継承者がいなくなってしまうと思うのですが、その辺はどのような押さえをされているのかなというのだけ確認しておきたいと思います。

○委員長（貳又聖規君） 鶴沢アイヌ政策推進室室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴沢友寿君） まず1点目の白老モシリの会員数なのですが、私が押さええている範囲では、ほぼアイヌ協会の会員と重複しているという捉えでおります。アイヌ協会の内数というような形で捉えてございます。ちょっと、そうではない方もいるのかもしれないのですが、大半は顔ぶれを見てもアイヌ協会の会員となっておりまして、そのように捉えております。

あともう一点、新規の講座の前田委員おっしゃるとおり、やはり今までよく見た顔ばかりです。最近になって、やはりちょっとアイヌ文化に興味があるということで、本当に数人になのですが新規で若い方が入ってきているのですが、まだやはり数名単位ということで、なかなか伝承者の育成までに至るまで時間がかかりそうなのですが、その辺の発掘をしていきたいと思います。

今後ちょっと、我々も先進地にも行ってしっかり一度勉強もしたいなということで、本当に若年者の取組ということで、本当に大きな課題と捉えておりますので、そこに重点を入れて取り組んでいきたいと考えております。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） アイヌの講座の受講者ですが、例えば1回の受講である程度覚えられるものですか、やはり3年間通って覚えられるものなどもあるので、そういった部分では、受講者数は少ないですが、一定の効果があるのかなとは思っております。

ただ新たな人ということであれば、今講座などの募集をして受講者を募っている形ですけども、今、政策推進課でも公共施設や公共交通の意見交換会ということで、行っているのですが、ある程度、受講者を募るとというやり方もあるのですが、今後は出向いて講座を開設するなど、そのような発想も必要かなと思っておりますし、ほかにもルーツ&アーツの取組などアイヌ文化に触れていただいている部分などがありますので、そのような民間の任意団体や企業などとの連携というのも今後必要になってくるのかなあと思っております。

また、道外プロモーションなどでもそのようなムックリの演奏や刺しゅう体験などやっていますので、そのよう裾野というか、そのような取組をしていくのと、子供たちに幼少期からアイヌ文化に触れてもらう機会を今もやっているのですが、より充実させていく取組が必要ではないかなと考えております。

○委員長（貳又聖規君） 前田博之委員。

○委員（前田博之君） 分かりました。それで研修の関係なのですが、今この詩集やオヒョウを使っていろいろなことやっている部分の指導者の基礎というか、以前はそのような人が育った母体というのは、旧アイヌ民族博物館で働いていた人や教わった人、技術継承した人方が出てこのようなことやっています。現実にはウポポイの中では、今のある国立博物館では、そのような育成のようなことをやっているのですか。職員もそうですし、社会教育事業の一環として町民など興味のある人を募集してその中で育成するなど、或いは過去には一獲のマグロで解体してアイヌ文化伝承したのですが、今もうやっていないのです。カジキマグロで、そのようなことが、今、過去の財団がそれだけ伝承に寄与してきたものが途絶え、ウポポイはそういう過去の財団がやっていたようなことを、現実的にやっているのかどうかというのは、この前見たら、チラシを見たら、なんか怪獣だとかまるっきり関係ないようなことをやってみたり、どうもその辺をどういう認識も、そこまで質問いいのかどうか分からないのですが、その辺の状況はどのようになっているのですか。そうでなければ、言いたいのは今、そのように育った人がここにある刺しゅうの人方などいろいろやっているのだけれど、その母体として、団体として伝承していく母体はないです。

それが今は、本来はウポポイが今度やるべきだと思うのだけれど、その辺の実態はどのようになっているのですか。

○委員長（貳又聖規君） 鶴澤アイヌ政策推進室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴澤友寿君） 今のご質問ですが、私もアイヌ政策担当になってから2年以上経過しまして、前の博物館のように表向きに目立ったのはないのですが、実はちゃんとそこも引き継がれておりまして、例えば、ウポポイの若い人というのが、アイヌ協会の会員にも入っている方がかなり増えております。

例えば、昨年白老生活館の儀式をやったときに若い人が地鎮祭をやったり、あのような

メンバーはウポポイの若いメンバーなのです。結局、休みなどで、伝承ために出てきていろいろな取組をやっているとして、あのような儀式もそうですけれど、アイヌ刺しゅうや踊りなど、あらゆる場面で来て指導や一緒に学んだり、そのような取組を行っております。

例えば、旧アイヌ民族博物館のOBが行って丸木舟の制作に関わって、若い人たちを集めて、政策に関わったり、ちょっとなかなか前のように表向きには見えないのですが、そこはしっかり取り組んでいると捉えております。

○委員長（貳又聖規君） ほか、質問のある方は。

佐藤雄大委員。

○委員（佐藤雄大君） 令和3年のときに、僕も当時委員会で所管事務をとったのですが、その人材（ひと）、素材（もの）、財源（かね）ということで、この確保の手段であったり取組の明確化みたいなことを、委員会の意見で出したと思うのですが、そのときに、白老モシリとの懇談の中で、5年以内に自然の素材がなくなってしまう危険性があるというお話があったと思うのですが、今実際にアイヌ政策推進交付金を使って、その素材の確保というものをやってきたと思うのですが、現状はどういった状況なのでしょうか。お聞きしたいと思います。

○委員（広地紀彰君） 鶴沢アイヌ政策推進室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴澤友寿君） 今、苗畑などでやっているのは、天候の関係で粟、ヒエの収穫量が少ないなど、そのようなことは聞いておりまして、樹木などは順調に発育しています。最近懸念なのが、ゴザを作るガマです。あれはなかなか植えたらすぐ出てくるものではなくて、

一定の条件のところやるので、そのような採取する部分が年々減ってはいるなど、また常にいろいろな地域などを回って、いいものが入ってないか模索したり、一番聞いているのはガマの安定的な採取がちょっと不安だと聞いております。それ以外は、天候によって取れる、取れないとありますが順調とは聞いております。

○委員長（貳又聖規君） 佐藤雄大委員。

○委員（佐藤雄大君） それはガマのこと、令和3年のときもよくおっしゃっていたと思うのですが、多分お金をかけたからできるということではないのです。おそらく。

あともう一つ、多分一番難しい問題というか、大きい問題が、結局アイヌ関連団体の統一化みたいな話が出ていたと思うのですが、あのときも出ていたのですが、その後どのようなになったのかと、そういう話が出てくるのかどうかという、最後そこだけ聞かせてください。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 令和3年のときにも一般質問か何かで、アイヌ団体の統合だとかという話があったのかなと思います。俗にいうアイヌ協会や白老モシリや、芸能保存会というところなのかなあというところで、役場としても町のイベント等で舞踊や刺しゅう体験など、木彫やいろいろな場面で各団体にはお手伝いいただいているということで、先ほど事務局体制の強化、やはり高齢化というところで役場が音頭を取ってというのはなかなか難しいのかもしれませんが、やはりアイヌ文化の継承をしていくためには、そのような統合と

いうのも、今後、必要な考えにはなっていくのかなあというところで、なかなかやり方など、アイヌ文化の継承という方向は皆さん一緒なのだと思いますが、それぞれにやってきた部分の違いというのがちょっとあるので、そこの役場が入って軌道修正など、今後やはり少なくなっていく上では、統合していかないと駄目なのだというのは、考える時期には来ているのかなとは考えていますので、今すぐ統合だとかということはできないですが、そのような場面とていうか、一緒になって考えていく時期に来てるかなと感じています。

○委員長（貳又聖規君） 広地紀彰委員。

○委員（広地紀彰君） まずは資料説明ご苦労さまでした。

いろいろなことに取り組んだなというのが見てとれました。その中で、最近札幌大学の関係なのですけれども、アイヌ文化教育研究センターの設立がなされて、結構、本田教授だとかと関わり合いながら、学術的な面においてもアイヌ文化の振興は図られてきたのかなと認識していたのですが、最近のそのような外との関わり合い、基本計画を中心とした外との関わり合いについて実態はどのように、最近は推移していますか。

○委員長（貳又聖規君） 鶴澤アイヌ政策推進室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴澤友寿君） 今のご質問なのですが、私担当になる前はちょっといろいろ名前を聞いていて、担当になってから町と直接コラボやそのようなのはないのですが、ウポポイでは、いろいろ連携したり、やっているというのは聞いてはおります。

今、町で積極的に、例えば札幌大学と連携しているなど、今現在はない状況ですが、我々もいろんな問合せなどがあつたら、積極的に関わったり、いろいろな繋がりを大事にしたいと思っておりますので、連携をしていきたいと思っております。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 札幌大学ではないのですが、名古屋外国語大学なども、来町されてアイヌ文化だけではなく、白老の文化であったり、観光であったりというのを学ばれて、最後に意見交換みたいな形で発表会のようなものやらさせていただいて、そのような部分では、カナダのビショップ大学もこちらに訪れておもてなしガイドセンターの方で対応させていただきましたが、そのような外部の繋がり、また今回10月末から町長、議長、またうちの担当も含めて台湾に行かれますので、そのような交流というのはある一定程度あるかなと捉えております。

○委員長（貳又聖規君） 広地紀彰委員。

○委員（広地紀彰君） この札幌大学のアイヌ文化教育研究センターの設立には、アイヌ民族文化財団の理事長されている常本先生も参画されていますので、そのような部分から考えても、当然アイヌ文化振興のナショナルセンターが所在するまちとして、一層の連携を果たされていく必要があるのかなと捉えていますので、その見解を伺いたいと思います。

若干視点を変えて、そのようなアイヌ文化をこれから振興発展させるためには、やはりその環境整備が非常に重要になってくるのではないかなと捉えています。その中で、白老生活館が新築で、事業が無事果たされて、エアコンのついた快適な施設ができたのかなと思っていて、今、ほかにもある程度これから進めるところはあるのですが、今でも

様々なサークルが生活館を舞台にしていろいろな活動を末永く支えていただいているのは、白老町にとっては大きな財産ではないかなと捉えています。そのような環境整備、特に大切なのはその先の常設できるところがないということをよく言われるのです。年に何回か言われます。

実際にアイヌ協会で、ある作品をコミセンで展示したのです。1週間展示して倉庫に眠らせていくのはもったいないと理事長から言われたのだと、展示された方がおっしゃっていました。

ほかにも木彫などを始め、私の知っている方はもう大分前に亡くなってしまったのですが、おそらくお土産物店も経営されていた方なので、蔵にどっさり、多分作品が眠っているのではないのかなと思うのです。竹浦に木彫で、ものすごい木彫りで本当に何千万円できくのかなというぐらい、たくさん収蔵されてる方が今はもう引っ越してしまっただけですが、そのような眠っている財産をこれから大切に保存、発展させていくためにも、そのような環境をぜひ整えていく必要があるのではないかなと思うのですが、その辺りの活動やその展示の考え方についてもあわせてお伺いしたいと思います。

○委員長（貳又聖規君） 鶴澤アイヌ政策推進室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴澤友寿君） 1点目の研究センターとの連携です。今現在ウポポイとの連携強化がかなり密になっておりまして、国交省のウポポイ誘客推進の戦略の關係の部分で研究センターとの関わり、あと研究センターの北原先生に個人的にもお知り合いとかお世話なっている方もいらっしゃるものですから、そこは積極的に連携していきたいと思っております。

あと展示品です。これも今ウポポイでも盛んに町民利用を高めたいと、より親しみを持った施設にして欲しいということで、ちょっと常設はいきなり厳しいかと思うのですが、例えば、町内のアイヌ関係団体がつくった展示品をウポポイ内で期間限定に最初はなるかもしれないのですが、展示していただきそれを町民の方に見に行っていただくと、そのような取組ができないかということで、意見交換などそのような協議の場で、今相談をさせてもらっているところであります。このほかにもいろいろウポポイを、せっかく国立博物館あるので活用した取組ができないかなということで日々模索しております。

○委員長（貳又聖規君） 広地紀彰委員。

○委員（広地紀彰君） ありがとうございます。名古屋外国語大学には世界共生学部があるのを私も最近ですが知りました。2017年にも先住民族としてのアイヌの文化と権利というテーマで講演会を開催したり、本当に精力的に関わっていただいているのかなと思います。ただ、外国語という外国語をスキルとしてではなくて、それを通して文化を共生していくという姿勢で研究されているところとの連携、これからも発展のためには非常に重要ではないかなと言われています。若干関連してになるのですが、ただそのためにも生活の安定がどうしても欠かせないのかなと、先ほど環境という話もしましたが白老町のアイヌ政策の基本方針の中にも、具体的な方針で産業の振興と生活環境の充実に努めるとありまして、やはりいろいろな文化を担っていくため担い手の生計です。生計の問題をどのように捉えている

かというのはやはりそこまで包括的に、白老町の場合にアイヌ政策の基本方針は網羅しているのかなという部分は評価しています。

ただその中で、せっかくこのような名古屋の外国語大学、また札幌大学や北海道大学でも様々な形で研究展開されているにも関わらず、残念ながら北海道大学のアイヌ先住民研究センターの調査で明らかのように、進学率に課題があったりなど、2015年の調査でも10ポイント近く大学の進学率が低い実態があります。これは分析しなければ大変大切なことではないかなと思うのです。せっかく大学に通っても、中途退学される方も多いと触れられています。高校進学者のうち中退したものは12.9%、全国平均同時期の高校中退率が全国平均で2.1%だったことと比べると非常に高いです。大学進学者の中退率が20.3%でありまして、これ時期ちょっと違うのですが、平成19年の私学の中退者が2.7%から考えたら、9倍ぐらい高い数値になっています。

これから民族を自覚していない人も含めて、このような将来大学、白老で生まれ育った方達が、自己実現を果たしてアイヌ文化に対して理解をさらに深め、研究を高めていただく観点においても、このような生活の安定といった部分は、これからのこのアイヌ文化の継承・担い手対策にとっては、この大きな基盤になる重要な事業ではないかと考えています。さらにその見解を伺ってお願いします。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 広地委員のおっしゃるとおり北海道アイヌ協会の総会に参加したときも同様な形で、やはり貧困などというような学力のこともおっしゃっていました。

当町としては、まずアイヌ交付金を活用してふるさと学習ですとか、そのようなものを実施していると。また、道の事業ではありますけども、入学支度金、就学支度金、通学費の補助ということで、そこの申請の窓口としてうちの2名の相談員が対応しているところでございます。

また、住宅貸付資金もやっているのですが、今、実はうちのアイヌの貸付資金の利率より銀行のほうが安いものですから、最近はそのような形の申請はないという形になっております。やはり生活の安定というところで、その手仕事、木彫関係が生業として成り立つのかというと、なかなか厳しい現状があるのかなあというところで、町として何ができるということであれば、役場としてアイヌ文化を広く情報発信していくと、やはり平取は木彫ということで、貝澤先生がある程度有名になっていますので、町としてはそのような作品に付加価値を取りつけていく取組ということで、白老町の魅力の発信であったり、そういったことをしながら付加価値をつけていく取組など、また今、アイヌの作品も千歳空港に行ったりウポポイに行ったり、ポロトミンタラに行ったりしていますが、そのような販路拡大の支援などの取組をしていく必要があるのかなとは考えております。

○委員長（貳又聖規君） 森山秀晃副委員長。

○副委員長（森山秀晃君） 結構、団体がいっぱいあるのですが、各団体でそれぞれで文化を継承していかないといけない。これを伝えていかなければいけないという取組を一生懸命

されているというのはいろいろな団体の方のお話聞いても分かるのですが、先ほど佐藤委員がおっしゃったとおり、方向性是一緒でそれぞれが一生懸命頑張っても、小さいところで頑張るのと、1つ固まりになって頑張るのだったら、全然この推進の進み具合というのが変わってくると思うので、なかなか難しいところということで、さきほど太田課長もおっしゃっていましたが、それぞれ思っている部分が強い、こだわりと言ったらちょっと語弊あるかもしれないのですが、そのようなものが強い部分があるので難しいとは思いますが、今後のアイヌ文化の伝承のことを考えると、それこそ観光協会みたいな形で、1つトップに何かを置いてそれぞれをまとめていくのか、それとも行政側がそこにてこ入れで入っていくのかというのは、どのような形が一番いいのかというのは、実際やってみないと分からないところではあると思うのですが、その部分も考えていかないといけないというのが1つ。

もう一つ、先ほど人材育成に係る今後の対策等のところで、移住定住対策と連携したり、家賃サポート事業と空き店舗活用等を使ってというお話があったと思うのですが、これ、ウポポイのPR道外プロモーションの来場者数というのはもう一つの資料に出ているのですが、実際この担い手を募集する何か事業など、道外のプロモーションという形ではやってはいるのか。このウポポイとは別としてやっているのかどうかというのをまず1つ伺います。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 各団体の統合で、その文化を継承していくというところですが、先ほどのお答えになるかもしれないのですが、やはり担い手対策ということで、高齢化、アイヌ協会の会員数も減ってきている。また担当から説明ありましたが、アイヌ協会と白老モシリに入っている人がほぼ同じというか、ダブって入っているのがほとんどだということから見ると、一緒になってやっていくのがということは我々も思っているのですが、なかなか昔からの人間関係も含めて、なかなかうまくいかないところもあるのかなというふうには考えているのですが、一度にということではなくて、連携できる部分は連携していきましょう。そのような取組は町としてもできるのかなと思いますので、そのような小さい部分からやっていって将来的な統合というのでも考えていかないとだめなのかなというところと、やはり、事務局体制としてなかなか高齢化というところもあって、そこにはやはり先ほど長谷川委員が言った情報発信ということです。やはり若い人が事務局にいるのといないのでは、そのようなところも違ってくるのかなと思いますので、あとは事務局体制の強化などというのを取組もしていければなと思っております。

○委員長（貳又聖規君） 鶴澤アイヌ政策推進室長。

○アイヌ政策推進室長（鶴澤友寿君） 道外に向けての人材育成で、今のウポポイPRはアイヌ文化を知っていただくという取組で、あくまでもそこに興味を持っていただいて来ていただくということで、人材育成についての道外に向けたPRというのは、現在は行っていない状況でございます。

○委員長（貳又聖規君） 森山秀晃副委員長。

○副委員長（森山秀晃君） 統合のところは、今のお話いただいたので大丈夫なのですけれ

ど、担い手不足のところ、まずは今、アイヌ文化を知ってもらうために道外にプロモーションとしてやっているという話ではあったのですが、これ、その担い手の部分、人材育成まず入ってきてもらってからスタートだと思うのですが、人口対策と一緒に思うのです。町内で人を増やすためにはまずは移住してきてもらって、そこから子供を産んでもらってというのが大事だと思うのですが、このアイヌ文化の伝承に関しても担い手となる人が外からまず来てもらって、そこから学んでもらうという形になると思うので、道外の人もそうなのですけど、この間まで、

地域おこしの協力隊として来ていただいた乾さんのような形で、札幌から白老に来て伝承してもらっていて、今もたびたび乾さんも白老で展示をしたり、イベントのお手伝いしたりなどしてもらっていると思うのですが、そのような形で、今道外で最初聞いたのですが、道内のほかの地域から、そのような若手の40代以下の若手の方が白老に来てもらって、白老のアイヌの文化や手仕事、工芸品もそうですが、そのようなものを伝承していってもらって、また次世代にどんどんつないでいく必要があると思うので、その担い手を募集する。先ほどの家賃サポートであったり、空き店舗活用事業などと連携させてやっていくことができれば、白老に行って学ぼうという方が、どんどん入ってきてもらって次に繋がっていくのかなと思うのですけれど、その部分の今後の考え方をお伺いして終わります。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） 担い手の募集ということで、なかなか今そのような発想がなかったのですが、そこの部分は各団体にも聞き取りを行った中でそのような取組も今後は必要になってくるのかなとは思っております。

移住の部分で言えば、政策推進課で移住相談会を、東京や大阪で年2回程度行っていて、その中では、もちろんアイヌ文化をもちろん白老町のPRとしてお伝えしているところがございます。また家賃サポートの事業があって、その家賃サポートを利用されているウポポイの職員も数名おりますので、そのような白老町として移住対策というところを広く道内・道外、例えば森山副委員長が言われるようにアイヌの団体に発信するなど、そのような取組はできるのかなと思っております。

そのような取組をしながらというところと、名古屋外国語大学のほうで、あそこは白老で調査研究ということで来ていただいて、残念ながらアイヌ文化に興味を持っていたいたのですが、平取町に就職された方が1名いるので、ただそういうアイヌ文化に触れてもらって興味を持ってもらってそこにお勤めしてもらおうというところなので、そのようなのが今後はどんどんと取組を強化していく必要があるのかなとは考えています。

○委員長（貳又聖規君） 一通り皆さん、委員からご質問いただきました。

もう少しお付き合いいただきたいのですが、私から、私自身このアイヌ文化の関係については、特に言語復興の取組については2010年ぐらいからいろいろ自身で研究、勉強させていただいています。2017年にハワイ島ヒロ大学にお伺いして、その言語復興の取組について、いろいろ調査してきています。実は私冒頭でアイヌ登録人口の関係言いましたが、そこに繋がる話になるのですが、私当時2017年にハワイに訪れていろいろヒアリングした中で、まず

1つ驚いたことというのは、彼ら1980年代に、アイヌ語も、これは消滅的な危機言語、ユネスコのそれにある。そしてハワイもそれと同じ段階だったのです。

1980年に、実はハワイ島ヒロ大学の研究者の皆さんは、北海道白老町にも来ています。それは彼らはどういうミッションで来たかという、先進地北海道のアイヌの先住民族の文化継承の在り方について研究していたのです。それを今度ハワイに持ち帰って、彼らはどのような取組をしたかという、天気予報でハワイ語を展開したり、ニューズペーパー等でもこうやる。

そして、そこから幼児期教育で言語に触れ合う取組をして行ったのです。

それのお話を聞いたのが私2017年でした。実は今白老町に4日前から、その言語復興の研究者、ハワイ島ヒロ大学の今の教授の皆さん、今白老に来ておりますが、実は昨日いろいろと意見交換させていただきました。

そうすると、研究者ご夫妻で来ておりますが、彼女彼らのそのお子さん、今24歳になる女性、それから今20歳ぐらいになる男の子もいますが、もう実際にハワイ語で語り合っていると。すなわち白老町に置き換えるともうアイヌ語で語り合える、そのようなハワイアンやうちの町に置き換えるとアイヌが多くいるということなのです。

それはもう本当にすごいなとまず思ったわけです。あともう一つ、そのアプローチの仕方というところなのですが、やはり白老町としてはこのナショナルセンターがある中で、これは世界を意識しなければならないというところが1つあると思うのです。その中でこのアイヌ文化の継承と担い手対策というところでいくと、私たちのイメージは今までウポポイに行つて、各小中高生が、勉強するですとか、あとは講師を招いて勉強する。これももちろん大事なことなのですが、今回、ハワイの先生たちとの意見交換の中で、なるほどと思ったことが1つありましたので紹介いたします。

1つは、ニュージーランドのラグビー、オールブラックス、皆さんハッカやります。そこには、マオリの方もいれば、そうではない方々も一緒になってハッカを踊って試合に臨むわけです。ワールドカップでも非常に良い成績を残しました。実は、彼ら今ハワイ島でどのような取組をしているかという、サッカーから先住民族文化をリスペクトする、今制作に動いています。実際に今ハワイのサッカーチームというのが、その研究者のお子さんがたまたま今20歳になる息子さんが、今ハワイのナショナルチーム、サッカーチームの選手になっているということで、昨日ちょっと動画を見せていただいたんですが、もうハワイ語でいろいろな自身の誇り高き、サッカー選手としての話をしているわけです。これ北海道で置き換えるとどのような立ち位置になるかという、コンサドーレ札幌です。コンサドーレ札幌のアイヌのクラブチームみたいなイメージで捉えてください。今ハワイのサッカーチームはすごい成績もよくなって、今、実はワールドカップのFIFAでは、アメリカ代表になっているではないですか。今ハワイ代表として認められるぐらいの、勢いに来ているというのです。

すなわち、そのアプローチの仕方として見ると、私が申した数年前のアイヌ人口、生活実態調査では2万4,000人あったのが、今、1万4,000人だとか2,000人になって、もう半分以下

になっているというのは、ルーツは持っていても、登録するメリットが何もないと、そのようなところで白老は本当スポーツにも力を入れていますし、そのような意味で、なるほどスポーツを通して先住民文化を取り入れたスポーツ活動をする、そのような育成の中でアイヌへの誇りを持つという1つのやり方があるのだなということを学び取りました。

今ハワイでのクラブチーム、サッカーチームはもちろんハワイアンもいるというお話でしたし、日本人の留学生もその大学のチームに入っているらしいのです。いろいろなルーツがある子供たちで構成されている大学のチームがあって、そこからまた優秀な選手が出て、今ハワイのナショナルクラブの、コンサドーレみたいなプロスポーツ集団になっているというところですが、やはり、私が思うのは、白老町役場としてウポポイを起爆剤としたまちづくりを展開するということ、もちろんこれは大事ですけど、国道拡幅などといった要望ももちろんですが、やはり世界の先住民民族施策に倣って、国を動かすようなことは必要だろうと私は思うのです。

ですから、なるほどと、そういったハワイやそのニュージーランドに学んで、何がハワイは1980年代に北海道に来て彼らを学んできたのに、もうどんと追い越されています。追い越されているという言い方はちょっとどうなのかと思うのですが、白老町として海外を見渡すような政策づくりをしながら、国に提言するようなことが、私はやはり求められているのかなと思ひまして、1つ、これに対してはなかなか返答は難しいと思うのですが、ちょっと今海外を見ると、そのような事象がありましたのでご紹介をさせていただきたいと思ひます。何か一言ありますか。

前田博之委員。

○委員（前田博之君） 今日の文化の継承と担い手とてなっています。

僕、ちょっと革新的なことに触れたいのですが、今でも皆さん継承とか問題点、こう話しているけれど、現実はこの担い手といっても、何かというアイヌ文化でいくと、ある程度定義は定めなければ方向性が見えないのと、逆に担い手を育成すると言っても、若い人が来ても生活保障をしなければできないわけです。あなた担い手だから、アイヌ文化をやってくださいと言っても、生活ができなければ問題が出てくるのです。

正直言うと、担い手、農業業者で、議論しないけれど結果根っこ同じです。そのようなことをして、もう一つは、担い手が逆に何らかの形で独立したと、その人がそれで生活をできるかということです。それこそ結婚して子供つくる。それによってそのような部分を現実に、町、これ国もかかるのだけれど、今委員長も言ったけど町の部分の政策もあるのだけれど、その辺をきちんと整理して議論していかないと、結果的に美しい言葉で終わってしまうのです。その表現がいいかどうかは分かりません。

やはりそこをついていかないと、永遠の課題だと私は思います。せっかく委員会でみんなでやっているのだから、そこまである程度突っ込んで議会と町でこれだけは1つ具体的に政策化して、施策化してやってみようという方向性を見ていかないと、佐藤委員も話したけれど、3年のときも議論しているのだけれど、結果的に同じごとに、繰り返しになってしまうのです。どこかで何かを起点として具体化する。あるいは担い手が、私がやりたい。生活で

きるよと。そういうものを生み出していかなければ、結果的に白老も過去は、皆さん知っていると思うけど、木彫りですごい生活ができたわけです。すごい収入もあったし、だけど今衰退してしまっていて何人かしかいないのです。

それが本来は本州のように、一刀彫とかで伝統文化の規模になっていたらそれなりの担い手がいたはずなのです。それがなかった。

本来は白老もそのような状況にあるから、そのような当時のことを振り返って、担い手が生活できる、何を白老町として刺しゅうなのか、木彫りなのか、どのようなものを作りましょう。それはやはり白老の一大産業にして、産業にして担い手が来ても生活できるよという部分をつくっていかないと、僕はこれは正直な話議論がもう空転とは言えないけれど、同じことをグルグル回った議論でしかないかないと思うのですけれども、これ皆さんどのように認識しておられるのか分からないけれど、僕はそう思うのです。

まだ歴史が浅いからだけれど、やはり町の中でも町長も含めてそのような議論をしていかなければ前に進まないと思うのですが、どうですか。今までそのような担当課として。

○委員長（貳又聖規君） 太田政策推進課長。

○政策推進課長（太田 誠君） まだ、貳又委員長の部分からいくと、やはり海外との交流なども含めてウポポイがある白老町としては、いろいろな担い手対策に限らずアイヌ文化を伝えていかなければならないとか、いろいろな今委員長からいただいた意見も、昨日僕も教授と名刺交換をさせていただいて、やはりその文化を理解して正しく伝えていくという熱意みたいのを感じましたし、町としては、今の段階としてはやはりアイヌ語、何ていうのですか、幼少期からアイヌ文化に触れてもらうという事業を今の段階では展開していった中で、そのような参考事例も参考にしながら取組を進めていかなければならないのだなという部分と、生活保障の部分は役場としてその生活保障というのは、今の段階ではできないと思っていますので、今の段階としてはそういうPRなどを通して、アイヌ文化を理解してもらってその付加価値を高めていく取組しか、町としては下支えはできないのかなあというところと、そこに絡めてアイヌの人方だけではなく、移住や家賃サポートの部分でサポートしていくというところしか、今の段階としてはないのかなと思います。

○委員長（貳又聖規君） ありがとうございます。時間が来たので止めますけれども、もう一つだけちょっと私は考えているのは、この担い手育成という、白老で言ったら例えば木彫や手工芸などがあるのですけれど、やはりそのハワイやニュージーランドの考え方というのはいかに社会を変えるかという視点なのです。

それは何かというと、優秀な政治家を出す。北海道で言うとか日本でいくと萱野先生がいらして、いろいろな法整備をされた。今、ハワイが取り組んでいることはそのようなことです。優秀な政治家を出して、そしてそこからアイヌ産業、先住民の産業をしっかりと守るといって、例えば今、白老でいくと1つの手仕事の刺しゅうのコースターが1枚2,000円。ここのしっかりとした付加価値をちゃんと見せて、これを2万円で売るとか、そういう法整備をしながら連携しているわけです。

ですから、私たちの見方も担い手というのはアイヌ文化の伝承の担い手もちろん大事だ

けれども、そういったしっかりと広地委員おっしゃいます。例えば進学が厳しいとか、そのようなところもちゃんと制度をしっかりとつくって、環境をつくって、そのような優秀な人材をたくさん出すということなのです。

このプロサッカーの部分もそうです。ハワイ語のスーパースターが出たら、そこにリスペクトされるわけです。そうすると、今のこのアイヌ人口1万2,000人がまたこれもっと増えるわけです。そのようなあり様だと私は考えておりますので、まずこれについてコメントは要りませんので、お時間来ましたので、こちらで終了させていただきます。

暫時休憩いたします。

休憩 午前11時18分

再開 午前11時30分

○委員長（貳又聖規君） それでは、休憩を閉じて会議を再開いたします。

それでは、皆さんの次第にある1つのアイヌ文化の継承と担い手対策についてのご意見等あればお伺いしたいと思います。

広地紀彰委員。

○委員（広地紀彰君） まず、前段の説明を受けて、各議員が発言されたことを拝聴しました。

その中で、いわゆるアイヌ文化、刺しゅうや木彫等に象徴されるアイヌ文化をどのようにして、担い手対策していただかという議論では、せっかくの所管事務調査の過去の調査を踏まえた形としての発展がないのではないかなと思っています。というのは、まず、その基盤としてこのアイヌ文化の継承、やはり課題があったり、担い手育成に課題があるのはなぜかということをつまねなければいけないと感じています。

前田委員からも、1つ生業としての、産業としての関連性の課題があるのではないかなという指摘、これが仕事になっていくのかどうかと、またやっぱり生計を支え家庭を支えていけるようなものになっているのかどうかとという部分を、どういうふうにして発展させるかを考えなければ、アイヌ文化の継承や発展をなかなか難しいのではないかなといった視点は私も同感しています。

あと、それ以外にもお金にかわる価値もあるのではないかなと捉えています。まず1つは、町側も産業育成には頑張っていきたい。販路拡大も取り組んでいきたいという考え方は、決して悪い考え方ではないと思いますが、あとは別視点として、私はこのアイヌ文化の継承と担い手対策を通して、これを充実させろと。私たちの常任委員会が言う目的とは何かと。ただ若い人を入れればいい、もっとたくさんサービスを充実させて支えろというような議論ではいけなくて、何を目指していくのかという。例えば、私が飾る場所を用意しろと言ったのは、ただ住民がそういうふうに使われたから、もったいないからではないのです。そこに飾られることが誇りを持って欲しいから、自分の長年、自分のお父さんの作品、自分の作品が自分が亡くなっても残っていける。そこで、あそこにいつか飾られるぐらいの作品をつくろうと思える。そのような誇り、白老のアイヌの方たちの誇りになるような形に、それを誇る

形にできるような施設が必要ではないかと言ったつもりなのです。

だから、そのような継承と担い手対策は大事です。ただ、その根底に何が必要なのかということ、まず基盤の問題です。それと、この継承や担い手対策を施すことによって何を目標としていくのか。そのようなことを議論できるようになれば、この所管事務調査はすばらしいものになるのではないかなと感じていました。

○委員長（貳又聖規君） 前田博之委員。

○委員（前田博之君） 今、広地委員がお話されたことはある程度具体的に整理して議論する必要もあるけども、もう一点は僕は文化の継承部分は、ここはウポポイとの役割というのは非常に大きいと思うのです。ということは、いかに地域に出て、アイヌ文化振興を図るか。これ過去には昔のアイヌ民族博物館も言われたのです。自分だけで完結しているのではなくて、地域に行ってアイヌ文化の地社会教育事業として普及しなければいけない。そのようなことを後半いろいろとやってきたのです。僕はやはり、国立博物館だけで企画展、特別展をやる。それだけではだめだと思うのです。地域に職員が出て来て、テーマを持って、昔ユーカラの有名なのをやったことがあるのです。博物館でなくて僕らが主体となって。そのような博物館も今度は地域の中に入って、この文化伝承をする行動しなければ、これ町と差別化するなど、共同でもいいのです。それがないとだんだん僕は博物館が町民から遠くなると思うのです。

それで今、入場料1,200円が年間パスポートをもらえればタダだけど、企画展・特別展は個別に取るのです。金額。これ一応は僕行ってきたけれど300円払ったことがある。今も取るけど、ただでは入ったけれど、企画展・特別展のお金出すのなら、町民はやっぱり負担なのです。行かないのです。僕が言うのは逆に職員が出てきて継承する。そのような事業も必要なので、うちの委員会からも、町が言えるかどうか別にしても、それぐらいのことを提言してもらわないと、だんだん町民と隔離されるのです。その辺が僕としては、そういう視点が大事かなと思うのです。ましてあそこ全部塀をしまして公園にも行けないのです。昔は裏から入って釣りなどを楽しんだものです。

これ入場料はタダであるけれども、もう少し町民との接点を持つアイヌ文化の継承はみずからやってもらわなければ困ると私は思のですが、皆さんはどうですか。

○委員長（貳又聖規君） 今までの町のスタンスだと、ウポポイのことにはあまり物は言えなかったと。ただ、だけど今3者連携会議など、観光協会や白老町とウポポイと入れているけれども、私たちの委員会からもウポポイへの提案というか、そのようなことももっとこのようにしたほうがいいのではないかとというようなところも、議論の中に交えながらということで、そのような解釈でよろしいですか。

前田博之委員。

○委員（前田博之君） 今は、国土交通相の観光入館者誘致なのです。彼らの100万人のメンツのために、それも町も協力するのだけれど、いいのかどうかはこれは別にしてもっと別な視点からいけば文化継承、本来はそこが筋なのです。それにお金使うべきなのに、人を集めるためにお金をいっぱい使って、悪いけれど文化に対する生産性ではないのです。

だから、その辺はやはり、もっと物の見方を整理する必要があると思うのです。今は悪いけれどみそもくそも一緒になって、ウポポイ・ウポポイと騒いでいるけれど、その辺を整理していかないと絶対将来に禍根を残すよ。

○委員長（貳又聖規君） ほかの委員、いかがですか。

今の前田委員おっしゃっていただいたところ、私本当に共感いたすのですが、これはもう前田委員が研究されておりますので、森竹竹市先生のアイヌ滅びずの詩の中にも、やはりどんどんどんどんこれからの世代というのはアイヌのルーツは薄まっていくけれども、アイヌに見るその芸術性、そのような類なる芸術文化、手仕事のすばらしさ、そのようなものはずっと引き継がれるという詩などがありますから、やはりそのようなこともしっかり私たちもこのアイヌとしての誇り高き、そのようなところを発信すべきだとか、そのようなことはとても大事なことなのかなと思いながら聞いておりました。

前田博之委員。

○委員（前田博之君） もう何年になるのかな、森竹竹市研究会をやったのです。資料館を舞台にして、それで2冊ぐらい研究書をつくったかな。あれどこかの補助金もらったのかな。

全国で森竹竹市展をやったのです。僕は、熊本へ行ったのです。熊本の議事堂より広い会場、2人、3人で行ったのか、研究会の会員の人が3人くらい行って、会場を全部つくって展示したらお客さん来たのです。その中に沖縄からに住んでいる人がたまたま来たのです。森竹をずっと見て、アイヌの人がこれだけの文学的な表現をする人がいるのですね。僕の前でいろいろしゃべったのです。年配の人で話していたら涙を流して、沖縄もそうだったけれど、アイヌの人がすごい差別を受けたのですと涙ながらに話した人がいました。沖縄と似ていると。このような展覧会を見て北海道でこのようなことがあったということを、私達は知り得たことが大変貴重だったというのを涙ながらに、僕は話をして感動したのだけれど、やはりそのようにして、いい意味でその文化を伝えていく活動をしている。悪いけれど白老の人はあまり森竹竹市、一部の人だけれど評価しないという人もいるのですが、僕は評価しているのだけれど、そのような行動というか形で見せることで、他の人も感動するという場合もあるのです。そのようなことが大事だということです。

○委員長（貳又聖規君） 実際に今、森竹竹市さんのお墓というのは法伝寺にありますけれども、ウポポイを見た後に、そのバスが法伝寺に停まって、竹市さんのお墓のところに詩が書いてあるのです。それを見に来られる方々が結構多くいるということも聞いています。

それでは、ほかの委員さん、よろしいですか。広地委員と前田委員から賜ったご提言、これもしっかり踏まえて、やはり先ほど佐藤委員からもありましたけれども、前回の研究・調査からもやはりちょっと進めて、またちょっと少し我々も視野を広げながらまちのほうにも提言をしていくという方向性でよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（貳又聖規君） 続いて次第の2番目、視察の日程についてということで、事務局より説明お願いいたします。

本間事務局長。

○事務局長（本間弘樹君） 前回の会議で、まだ確定していなかった部分など、若干こう詰まってきた部分がありますのでご説明をしたいと思います。

それで、10月4日、今週の金曜日ですけれども、平取町の視察にまいりたいと思います。

集合時間、出発時間を8時半ということで、役場にお集まりいただきたいと思います。前回の会議で前田委員からお話をいただきました、提案いただきましたアイヌ3大歌人の飯干北斗さんの歌碑、こちらが町立の二風谷小学校のほうにあるということで、現地の確認をとりまして見ることは可能だということでしたので、視察の最後にそこに立ち寄って見たいと思います。そのあと、町内で昼食をとって帰ってくるということで、白老到着予定が14時半を考えております。

それと来月、11月5日、6日で釧路・阿寒地区と白糠町を視察に参ります。前回、白糠町が調整中ということで説明しましたが、オーケーいただきましたので、11月6日10時から白糠町の行政視察を行います。向こうから提案いただいた内容で、白糠のアイヌミュージアムポコロというところが、今年4月にリニューアルオープンしたということで、ぜひ見てくださいというご提案をいただきましたので、まずそちらのほうを見学したいと思います。

その後、移動いたしまして、ウレシパチセというアイヌ文化の活動施設になりますけれども、こちらがうちの白老生活館を建てる時の参考になった施設ということで、そちらを会場に行政視察、行政から説明をいただくという流れで考えています。

その下、今調整中としておりますけれども、行政からの説明のほかに、できれば民間の白糠アイヌ文化保存会の方も同席いただいて意見交換したいということで今調整をいただいているところでございます。

一番下に書いております白糠町のほうから、事前に質問項目をいただきたいということでありましたので、来週月曜まで10月7日月曜までに、各委員1項目ないし2項目程度、事務局のほうに提出いただければと思います。

暫時休憩します。

休憩 午前11時51分

再開 午前11時52分

○委員長（貳又聖規君） それでは、休憩を閉じて会議を再開いたします。

こちら視察の日程については、ほかございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（貳又聖規君） よろしいですか。

それでは、3番のその他、次期開催についてお願いいたします。

本間事務局長。

○事務局長（本間弘樹君） 次回開催なのですけれども、10月4日に視察に行くのですが 10月中のどこか、もしくは11月の視察後かと思っていたのですが。

○委員長（貳又聖規君） それでは、11月の道外視察終了後、実施するような形で正副委員

長にお任せください。よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（貳又聖規君） 以上をもちまして、本日の総務文教常任委員会を閉会いたします。

午前 11 時 52 分